

1-2-18c現実

「現実」についての第3弾です。
現代社会の行方について考えます。

③錯綜する「現実」

i) 二分法の限界

「ウィキペディア」、お世話になりますか。

ネット上の百科事典として便利ですが、誰もが編集できるためになんかアブナイことはわかっていますよね？

それは、ウィキペディアにかぎったことではありません。

ググって出てきた情報が必ずしも正しいとはかぎらない、というのは常識のほうです。

ディープフェイクといわれる技術が使われると、普通の人には見ている映像がホンモノなのか、ニセモノなのか、の区別が付きません。

ということは、ニセモノをホンモノだと思ふこともあれば、ホンモノをニセモノだと思ってしまうこともあるわけです。

さらに、生成AIは、学習した内容をもとにして、新しい文章や映像を作れるようになりました。

AIの作った作品は、ただのコピーでないとしても、オリジナルといえるのでしょうか。

現在のインターネットやAIの状況を見ていると、本当／嘘、ホンモノ／ニセモノ、オリジナル／コピー、そしてリアル／バーチャルなどと二分法的に考えることが本当によいのか、突きつけられているように感じます。

私たちの「現実」は、現実の1つのあり方でしかない、と行ってきました。

そもそも、私たちにとって「現実」とは、この世界で生きていくための方便にすぎません。

だから、この世界で生きていくために必要な姿を見せてくれるだけでいいわけで、極論すれば、それが本当だろうが嘘だろうが、どうでもいいのです。

そういえば、「嘘も方便」という言葉もあります。

たとえば、科学を重視する現代の目から見れば、キリスト教を絶対化した中世の神の教えは嘘かもしれませんが、中世ヨーロッパに生きる人たちにとって必要な方便だったはずです。

しかし、現代は、自分たちの狭い「現実」に閉じこもって生きていくわけにはいきません。

私たちがかかわる世界は今も拡大し続け、自分にとっての「現実」が唯一の現実ではないことを知らないわけにはいきません。

ii) 「分断」の先へ

それを私たちに見せてくれる場こそ、ネット社会だったはずです。

ネット社会は、さまざまな多様な情報が行き交う場です。

だからこそ、インターネットの普及は、互いの多様性を認めあう、自由で平等な世界を生み出すと期待されました。

が、実際には、社会の「分断」が深刻な問題としてもちあがっています。

というのは、ネット社会が情報を取捨選択できる場だからです。

たとえば、テレビをつけると、自分にとって好ましい話もいやな話もニュースとして届きます。

が、インターネットでは、見たくない記事は見なくてもいい。

かかわりたくないやつらとはかかわらなくてもいい。

SNSの発達は、人間の社会関係を大きく広げていくと思われましたが、実際は、自分と意見を同じにする仲間を広く集め、その中でのやりとりに終始することで、自分の意見の「正しさ」を確認することになりました。

本来、他者とのかかわりは、他者という違う存在を認めることから始まります。

が、むしろ、ネット社会では、同じ仲間のなかでぬくぬくと安住する傾向にあります。

SNS上でも、ネットのコメント欄でも、同じような意見や感想が並びます。

そこで反論しても、ある意味、空しいだけです。

論理など通じません。

ネット社会が一方的になりやすいのは、バズったり炎上したりすることを見てもわかります。

いいか悪いか、敵か味方かで二分して終了。

わかりやすくいいです。

が、「違う」ということは、「=敵」ではなく、自らを高めるための契機になるものです。

民主主義は、さまざまな意見があることを前提にしています。

互いに違うからこそ、よりよい意見が新たに生まれてくる。

そして、最終的には、ただ1つの「正しさ」などないから、多数決でとりあえずの決定をする、というのが民主主義です。

だから、自分の意見と違うものを敵と見なして社会を「分断」してしまうことが、民主主義のボスともいえるアメリカで顕著になっているのは憂うべき話です。

自分にとっての「現実」を絶対視するところには諍いしか生まれえないと思うのですが、、、

私たちは、現在のアメリカの姿を反面教師にしたいものです。